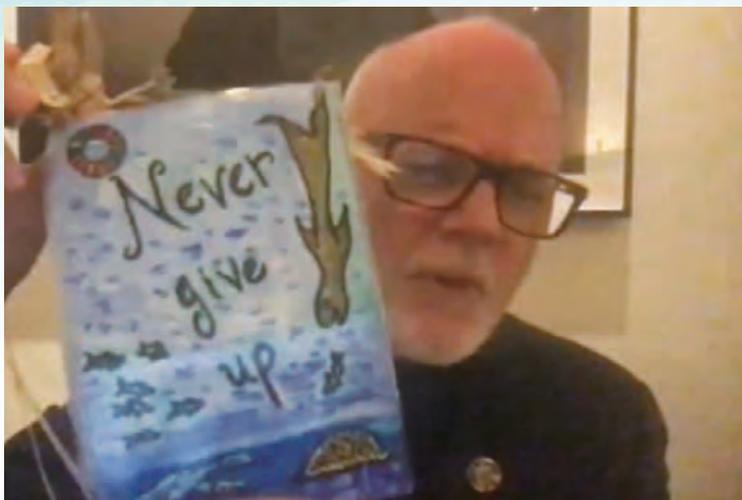


巻頭特集

**これからの10年が
海の未来を決める**

健全な海なくして健全な地球なし

健全な海なくして健全な地球なし



ピーター・トムソン：国連事務総長海洋特使

フィジーの外交官であり、2010年2月よりフィジーの国連常任代表を務めた。2016年9月から2017年9月まで国連総会議長を務め、現在は国連事務総長の海洋特使として海洋問題に係る国際社会の議論をリードする。1980年に臨時代理大使として日本に赴任しフィジー大使館設立の任にあたった。



インタビュワー

竹田有里：環境ジャーナリスト、『海洋白書』編集委員会委員（上）

角南 篤：（公財）笹川平和財団理事長（下）

※このインタビューは2021年12月に行われたものです。

竹田 有里

—— おはようございます、トムソン大使。環境ジャーナリストの竹田有里です。『海洋白書』の編集委員を務めています。ジャーナリストとしては、気候変動のテレビ番組を制作したり、世界中の環境難民を取材したりしています。最近では、日本で育った木を薄くスライスした、このような世界初の木製ストローを作りました。

ピーター・トムソン

本当ですか？ 再利用可能ですね。

竹田

—— はい。いま問題になっているプラスチックストローに対応するために開発した新しい製品です。さて、本日は、笹川平和財団の角南篤理事長とともにインタビューさせていただきます。新型コロナウイルスのオミクロン株の感染者急増が懸念されるなかですが、お

元気でお過ごしのことと思います。

早速ですが、先週にコスタリカに行かれたと伺っております。インタビューを始めるにあたり、どのような目的で行かれたのか伺ってもよろしいでしょうか？

トムソン

はい。アルバラード大統領^①が署名した2つの重要な法令に立ち会うために、コスタリカ政府から招待されたのです。1つ目は、SDG14.1のために私が非常に興味を持っている海洋ゴミに関するもので、2つ目はココス島^②の海洋保護区に関する法令への署名でした。この法令により、コスタリカの排他的経済水域（EEZ）の海洋保護区は30%に達しました。つまり、各国が2030年に設定しようとしている高い目標に、コスタリカは先週、到達したのです。彼らは必要な行動をとっており、私はこの誘いを断ることができませんでした。コスタリカに行って本当に良かったと思っています。そこでは多くの

① カロス・アルバラード。コスタリカの大統領。38歳の若さで大統領に就任した。

② コスタリカ沖の島。1982年から海洋保護区に指定。2021年にはその面積を27倍に拡大した。

漁師たちに会い、小規模漁業の組合の会長にも会いました。世界は小規模な職人的漁業から学べることがたくさんあると思います。コスタリカでは非常に充実した数日間を過ごすことができました。

竹田

—— 素晴らしいですね。海を守り、持続的に利用するために取り組まれている様子が良くわかりました。偶然目にしたのですが、英国のグラスゴーで開催されたCOP26^③で、トムソン大使があるネームプレートに身につけていた写真が、とても印象に残っています。ネームプレートの絵はお孫さんが描いたものそうですね。もしよろしければ、そのエピソードをお聞かせいただけますか？

トムソン

これがあなたの言うネームプレートです。両側のストラップに付けているのはバングラで作った鳩です。ネームプレートは「4人の孫娘の祖父です」と紹介しています。裏面には「決してあきらめない」というメッセージが書かれています。会議に登録したすべての人に、自分が誰かの「親」や「祖父母」、「叔父」や「甥」であることを示すネームプレートをつけることで、我われが気候変動問題に懸命に取り組むのは、自分たちのためでは



ない、ということを表現したかったのです。それは私たちの後続く人たちのためであり、私たちが愛する人たちのためなのです。私たちが、ネームプレートをつけることを気候変動枠組条約の事務局に提案しました。残念ながら、このアイデアを全員に売り込むことはできませんでしたが、私と友人たち数人がこのネームプレートをつけたところ、多くの人の注目を集めることができました。そこで私たちは、1年後にエジプトで開催予定のCOP27に向けて、参加者が進んでこのネームプレートに身をつけてくれるよう、ソーシャルメディアを使ったキャンペーンを展開することにしました。COPは世代を超えた正義のために、子どもや孫のためにやっているのだと。



③ 国連気候変動枠組条約第26回締約国会議(2021年10月31日～11月13日に開催)。

竹田

—— 素晴らしいアイデアですね。他にも、トムソン大使が船の上でバトンを手渡している写真も見つけました。このバトンについてもお話を伺うことはできますか。

トムソン

この「自然のバトン」は、オーシャンレース^④と私の事務所のパートナーシップによるものです。オーシャンレースは世界各地でヨットを走らせて競い合う最も過酷なチームレースと呼ばれています。私は、あるアーティストに流木を使った美しいバトンを作ってもらいました。バトンの中には鉄の筒が入っていて、いま開催されているさまざまな大規模な国際会議の議長たちからのメッセージが入れています。これは、すべてが「つながっている」ことを象徴しているのです。これまで私たちは、このような会議に「縦割り」で行動していました。しかし、生物多様性の損失、気候変動、海洋の健全性の低下など、すべては人類が地球を不当に扱っているという問題に関連しています。私たちは皆つながって、この問題乗り越えなければならないのです。そこで、私たちはバトンを渡す「旅」を始めました。数か月前に開催されたIUCN^⑤の世界自然保護会議のために、ヨットに乗ってバルセロナからマルセイユまで航海しました。そこからCOP26のためにグラスゴーまでは自転車でリレーしました。2022年は、ヨットでフランスのプレストの「ワン・オーシャン・サミット」^⑥、ケニアのナイロビの国連環境総会（UNEA5.2）、4月開催のパラオの「アワ・オーシャン会議」^⑦と続き、最後はもちろん2022年6月にポルトガルのリスボンで開催される国連海洋会議で締めくくられる予定です。

竹田

—— 本当に、オリンピックの聖火リレーのようなものですね。さて、やはりCOP26の成果、たとえばグラスゴー気候合意についての見解もお聞きしなければなりません。COP26の成果に満足されていますでしょうか？



トムソン

ご存知のように、会議の最後の段階で石炭火力発電に関する表現が弱められたことについては、誰もが失望したと思います。人類はまだ非常に危険な領域にいます。一方で、地球温暖化の軌道については、改善されたように思います。グラスゴーの前は、（平均気温が）3度以上上昇する軌道に乗っていましたが、現在は2.4度程度だと思います。正確な数字は違うかもしれませんが、まだその程度の改善なのです。国際社会は、温暖化が1.5度を超えてはいけなことがわかっているの、やるべきことはたくさんあります。良い方向には向かい始めていますが、まだ人類は赤信号に直面しているのです。海洋に関しては、今回のCOP26は誇りに思うべき成果でした。つまり、長年の努力の結果、海洋が気候変動枠組条約のプロセスによりやく組み込まれたということです。今後、気候変動枠組条約の事務局は、すべての作業に海洋問題を盛り込み、それについて報告するよう求められています。また、それを実現するようSBSTA^⑧の議長にも要請されています。2020年のような1回限りの対話ではなく、海洋気候問題について話し合い、それを気候変動枠組条約に報告するためのSBSTAによる毎年定例の海洋対話になりました。大気と海洋が織りなす「気候」が存在する惑星として、こうあるべきだと皆さんも同じ気持ちだと思います。いまは、海洋は議論の渦中にいるので、やるべきことがたくさんあるのです。

角南 篤

—— お久しぶりです。このインタビューに参加いただきありがとうございます。そして、笹川平和財団へのご

④ The Ocean Race スペインのアリカンテをスタート地として、寄港しながら地球を一周するヨットレース。

⑤ International Union for Conservation of Nature 国際自然保護連合

⑥ One Ocean Summit 2022年2月9日～11日に、フランス北西部のプレストで開催された国際会議。健全で持続可能な海洋の実現に向けて、国際社会を動員して具体的な行動を起こすことを目的とし、EU理事会議長国であるフランスが国連の支援を受けて開催。



協力に本当に感謝しています。本当は私も COP26 で海洋の仲間たちにお会いしたかったのですが、別の用事があり日本を離れることができませんでした。しかし、COP26 の結果について、あなたが肯定的な評価をしてくれたことをとても嬉しく思います。なぜなら、私たちは長年、気候変動問題に海洋を取り入れるために協力してきたからです。あなたの言うとおり、英国と COP26 は、気候変動に関する対話のなかで海洋が大きな位置を占めるようになったという、非常に歴史的な瞬間に立ち会ったと思います。でも、本当に良かったのでしょうか？ COP26 の結果をどのように評価し、次の目標に向けて何をすべきとお考えでしょうか。

トムソン

私もあなたのように、多くの COP に参加してきました。私が今回の COP26 の結果に満足している理由のひとつは、今回は、気候変動という地球規模の危機を否定しようとする人たちがいない初めての COP だったからです。今回の会場にいた参加者は、「私たちは問題を抱えており、その解決策を示す必要がある」ということにコ

ミットしていました。私にとって、これはまったく異なるタイプの COP でした。ただし、私は全体会議には参加していません。私にとって、すべては全体会議以外の場所で起きていることであり、それは非常に活気があり、革新的で、非常にポジティブなものでした。私も 2 週間の滞在中に 50 回くらいはスピーチをしたのでしょうか。全員が世界的な問題であることを認めていたので、とても建設的な雰囲気になりました。先ほど申し上げたように、世代を超えた正義を懸念する一人として、私たちはようやく正しい道を歩んでいるのだと思います。

角南

—— それは良かったです。ただ、COP26 の結果について私は、いくつかの批判的な意見も聞いています。彼らが期待していたのは、海洋のアジェンダをもっと推し進めることができるかどうか、という点だったのではないのでしょうか。もちろん、やるべきことはまだまだあると思いますが、COP26 が活気のあるイベントのひとつになっていることは事実で、非常にポジティブな要素が含まれていますから、あなたの意見に賛成です。

⑦ Our Ocean Conference 米国オバマ政権のジョン・ケリー国務長官(当時)が主導し、2014年6月にワシントンD.C.で開催されたのを皮切りに毎年開催されている国際会議。政府、NGO、民間など海洋に関わる多様なステークホルダーが一堂に会する会議で、パラオでの第7回の開催は、当初は2020年8月が予定されていた(コロナ禍で開催が延期)。

⑧ Subsidiary Body for Scientific and Technological Advice 科学上及び技術上の助言に関する補助機関。気候変動枠組条約のもとで年2回、会合が開催される。



COP24の様子(右から2番目が角南理事長、左から5番目がトムソン大使)(角田撮影)

竹田

—— 一方で、今回の COP26 が、日本の総選挙の翌日に開始されたことが残念でした。そのため日本のプレゼンスは限定的だったように思います。日本が、このような地球規模の問題にリーダーシップを発揮することを期待しています。そこで、角南理事長に、岸田政権への期待をお聞きしたいと思います。

角南

—— 私は 3 週間前にワシントンにいて、米国の国務省をはじめとした政府の人たちとミーティングをしていました。非常に印象的だったのは、彼らが日米関係やその他のことに関して多くの問題があると言っていたことです。そして、バイデン政権は「戦争」をしているということでした。他の外交とは大きく異なる点ですが、気候変動問題に関しては、政府全体が「戦争」をしているというのです。そして、この「戦争」に勝たなければならないのです。私がワシントンで感じた危機感は、日本にはありませんでした。日本政府は、2050 年までにゼロ・エミッションを達成することが、日本にとって大きなコミットメントだと考えています。しかし、ワシントンの人たちや政府の人たちが話しているような危機感、つまり、政府は本当に「戦争」の危機に直面しているという感覚はあまりないのではないのでしょうか。フランスのマクロン大統領は、いま、「One Ocean」というイニシアチブを掲げています。みんなが行動を起こしていま

す。しかし、日本ではそのような感覚はありません。その理由のひとつは、日本が基本的に「鎖国」状態にあり、人びとが海外に出て行かないからだと思います。国際的な対話に直接参加していないのです。海外への渡航が厳しく制限されているため、首相や閣僚、そしてすべての人びとが国内に閉じこもってしまっているのが非常に残念なことでした。そのため、日本の政策決定者の間では、危機感があまり共有されていなかったように思います。今後、首相やスタッフが、この世界的な危機感を本当に共有してくれることを期待しています。これは外交等とはまったく別のレベルの話です。私たちは、日米、米中の問題を抱えています。ウクライナにおけるロシアの問題もあります。しかし、気候変動の問題となるとどうでしょうか。それが課題だと思うのです。

トムソン

非常に興味深いお話をありがとうございます。少し前に国連事務総長のアントニオ・グテーレス氏が言った、「私たちは自然と戦争をしてきた、いまこそ平和を作る時だ」という言葉を思い起こします。自然と「戦争」してきたのは私たち自身であることを忘れてはなりません。自然は母親のようなもので、私たちはその抱擁のなかにいるのです。しかし、なぜか私たちは人間が自然よりも大きな存在であると想像してしまい、いまでもそれを続けているのです。誰かが CO₂ を排出する自動車に乗るたびに、母なる自然を苦しめているのです。ですから、平

和を実現するためには、私たち全員がやらなければならないことがたくさんあるのです。

竹田

—— そうですね。日本と海外との違いは、とても大きな問題だと思います。さて、2022年は海洋にとって非常に重要な年になります。パラオではアワ・オーシャン会議が開催されます。トムソン大使は、6月にリスボンで開催される第2回国連海洋会議の準備の陣頭指揮を執られています。ほかにも重要な国際会議がたくさんありますが、2022年に予定されている海洋に関連する主要なイベントを教えてください。

トムソン

そうですね。今後6か月間の私たちの活動レベルは、まったく前例のないものと言えます。まず、2月にフランス北西部のブレストで、マクロン大統領が主催するワン・オーシャン・サミットが開催されます。私はその開催に関わっています。これを皮切りに、この大きなオーシャン・アクションの波は6月のリスボンで開催される国連海洋会議にまで押し寄せます。4月には、米国政府とパラオ政府が共催するアワ・オーシャン会議がパラオで開催されます。これにも笹川平和財団や日本財団が大きな力を発揮してくれています。角南理事長と同じく、私も会議に向けて米国国務省と密に連絡を取り合っています。私は、ブレストとパラオの会議の相乗効果を高める役割を担っています。それは、ブレストで始まった会話とアイデアがパラオでも通じるようにし、6月の国連海洋会議で解決策を提示できるようにすることです。たとえば、IUU漁業⁹の抑制、より良い海洋保護区への資金援助など、同じようなテーマでの会議開催について調整しています。また、6月中旬には気候変動枠組条約のもとでSBSTAが開催され、海洋と気候変動に関する「対話」が行われます。

2月末のケニアのナイロビで開催される国連環境総会

(UNEA5.2)にも触れるべきでしょう。UNEA5.2では、海洋汚染防止のための国際条約の締結を目指しています。実際には、すべてのプラスチック汚染を対象としており、国際的に拘束力のある条約にするために交渉委員会を立ち上げることを目指しています。ですから、ナイロビはオーシャン・アクションのコミュニティにとって非常に重要になります。プラスチック汚染を止めることが、海の健全性を保つためには不可欠で、汚染という悲劇を終わらせようと支援してくれた日本にも感謝しています。3月には国家管轄権外区域における海洋生物多様性(BBNJ)に関する政府間会議もあります。これが最後の会議になるかどうかはわかりませんが、このプロセスで強固な条約が結ばれることは公海のカバナンズにとって非常に重要です。英国の「エコノミスト」誌がバーチャルで開催する世界海洋サミットもほぼ同時期になります。このほかにも、海洋に関する民間企業の会議、地域の会議、国の会議が数多く開催されています。

竹田

—— また、「30 by 30」という2030年までに全世界の海洋の30%を保護区とする目標案について、いかにして世界的な合意を得るかも、海洋政策の大きな課題のひとつになっていますね。その議論への期待と課題についてはいかがでしょうか。



トムソン大使が議長を務めた第71回国連総会
<https://www.un.org/counterterrorism/fr/node/12455>

⁹ Illegal, Unreported and Unregulated (違法・無報告・無規制)漁業

トムソン

先ほど述べた重要な会議のなかで2つほど挙げておりませんでした。ひとつは、2022年4月に中国の昆明での開催が予定されている生物多様性条約のCOP15^⑩です。地球の生物多様性の高い割合が海中や海上に生息し、特に「30 by 30」のことも考えると、この国際会議は海にとって非常に重要だと言えます。2030年までに地球の30%を保護することは、海の健全性の低下を止めるカギなのです。生物多様性条約の新たな枠組みに「30 by 30」が加わるように追求してくれた生物多様性コミュニティの働きに深く感謝しています。また、このプロセス全体を通して海洋コミュニティを歓迎してくれたことに感謝しています。

もうひとつは、世界貿易機関（WTO）の閣僚会議についてです。2021年に開催が予定されていた会議が延期になったのです。この会議も海洋にとって非常に重要なものです。というのも、20年以上の交渉を経て、ようやく有害な漁業補助金の撤廃に近づいたからです。この補助金は、人類が海洋生態系に与える最も有害なものと言われています。年間200～300億ドルの公的資金が、公海で減少する魚種を追いかける船団への補助金として使われています。このWTO閣僚会議は、有害な漁業補助金を永遠に止めるための非常に重要な会議です。私たちはその日程を待っているところです。海洋コミュニティは、これらの会議を注意深く見守る必要があります。

竹田

—— ありがとうございます。漁業補助金の話題が出ましたが、乱獲やIUU漁業について、期待や課題をお聞かせください。

トムソン

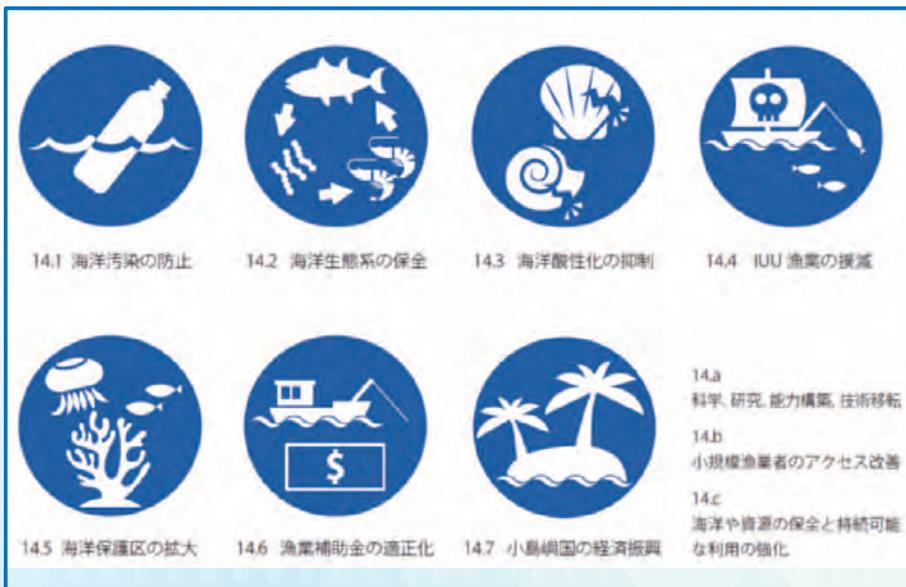
そうですね。フランスのワン・オーシャン・サミットとパラオのアワ・オーシャン会議では、この点が非常に重要なポイントになると考えています。6月にリスボンで開催される国連海洋会議に関しては、IUU漁業の撲滅はSDG14.4の主な対象であり、私たちの仕事の中心となります。リスボンの会議では、足元をしっかりと固めなければなりません。私たちの取組みは、必ずしもうまくいっているわけではありません。違法な漁業が続いていますが、コロナ禍の間に盛んになったケースもあるという証拠がたくさんあります。

角南

—— この点について、トムソン大使に質問したいことがあります。アワ・オーシャン会議の重要なテーマのひとつとして、IUU漁業について言及されましたが、フランスのプレストで開催されるワン・オーシャン・サミットでも同様でしょうか。あるいは、何かほかの議論が行われるのでしょうか？

トムソン

ワン・オーシャン・サミットでは基本的に10のワークショップと、各国の首脳による半日のサミットが行われます。ワークショップのひとつは、魚を含めた「海から取る資源」に関するものなので、IUU漁業について議論されることは確かです。多くの方はこのIUU漁業の議論に参加することを強く望んでおり、プレストで得られた知見をパラオでも展開することができるでしょう。先ほど申し上げたように、リスボンに到着するまでには、IUU漁業や他の海洋の問題について、国際社



SDG14の要素

⑩ 第1部は2021年10月に開催。第2部は2022年7月～9月の間に開催予定。

会として責任を果たさなければなりません。私たちはこの目標をSDG14に設定したので、国際連合食糧農業機関（FAO）は、最新の調査結果を報告してくれます。もしうまくいっていなければ、どうやって改善するかを考えなければなりません。SDG14.4は2020年に満期を迎えました。私たちは常に、これは長く厳しい戦いになるだろうと考えてきました。これはプロセスなのです。この国連海洋会議の素晴らしい点は、私たちがどのように行動しているかを確認する機会を与えてくれることです。

角南

—— 素晴らしいです。国連海洋会議に向けて笹川平和財団でも取り組んでいきたいと思います。ありがとうございます。

竹田

—— SDGsに関連したものとして、2021年は「国連海洋科学の10年」がスタートしました。海洋科学を進めてSDGsに貢献するうえで、重要なことは何だとお考えですか？

トムソン

日本が「国連海洋科学の10年」の準備と目標達成に向けて、特に積極的に取り組んできたことに感謝します。なぜ国連総会がこの10年を宣言したかという点、私たちは海の科学的構造について学ぶことがたくさんあるからです。海の科学的特性のうち、私たちが知っているのは約20%に過ぎないと言われています。これは信じられないような状況です。私たちは、深海よりも火星や月の表面について知っているのです。それが、私たちをこのプロジェクトに駆り立てたのです。また、「我われが求める海のために必要な科学」という言葉も耳にしたことがあるでしょう。これこそが、私たちがここでやっていることなのです。パリに本部を置くユネスコ政府間海洋学委員会（IOC）は、この10年で素晴らしい仕事をし、私たちが望む海を実現するためのさまざまな要素をまとめあげました。世界各地で地域会議を開催し、科学



アワ・オーシャン会議が開催されるパラオのビーチ

界、学界、政治家がこの10年に望むことを確実に実行してきました。現在の傾向が続けば、2030年までに非常に難しい決断を迫られることになるでしょう。そのような難しい決断を下すための武器のひとつが、私たちが知っている海洋についての知識です。地球の70%を占める海洋。その科学的特性について、私たちは何を知っているのでしょうか。自分が話していることの全体像を知らずに大きな決断をしたくはありません。

竹田

—— はい。私もそのように思います。角南理事長は「国連海洋科学の10年」の日本の国内委員会の共同議長も務められています。海洋科学を推進するうえで重要な点についていかがでしょうか。

角南

—— そうですね。私たちがやろうとしていることの一つは、まず日本国内でこの「10年」を推進することです。一般の方だけでなく、科学者の間でも、この社会科学の発展のための世界的な取組みとその意味、そして私たちがこの取組みによって何を達成しようとしているのかは、残念ながらまだあまり知られていません。そのため、国内委員会を設置することで、まず日本国内で、このキャンペーンや海洋科学の発展のための世界的な取組みを推進しようとしています。また、実際にコミュニティを作り、アジアの他のコミュニティにも働きかけていきたいと考えています。海洋科学への取組みという点では、多くのネットワークやコラボレーションが可能です。韓国の科学コミュニティ、あるいは中国の科学コミュニティ、さらには東南アジアの科学コミュニティを巻き

込んで、世界の一部で海洋科学を発展させるために何が
できるかを話し合う、一種の地域的なプラットフォーム
を作りたいと考えています。また、今後、アジアでの優
れた実践例を世界のコミュニティと共有することも考え
ています。

トムソン

その言葉を聞いて良かったです。「国連海洋科学の10
年」はパートナーシップを目的としていると思います。
いま、地域間のパートナーシップについて、とても良い
説明を聞きました。私たちの観察結果を共有し、すべて
をデータバンクに蓄積して、皆がアクセスできるように
することです。

竹田

—— 素晴らしいですね。ご存知のように、日本は
2025年に大阪で万博を開催します。トムソン大使から
は、笹川平和財団が2021年10月に開催した「海の万
博セミナー」のために、ビデオメッセージを頂きました
が、2025年の万博に向けた期待をお聞かせください。

トムソン

2025年の万博はとても良い機会になりますね。私だけ
でなく、海洋関係者が一番期待しているのは、持続可能
なブルーエコノミーが万博で展開することだと思います。
ブルーエコノミーはSDG14には明記されていませんが、
基本的には海の資源を保全し、持続的に利用するための
ブルーエコノミーに行き着くので
す。2025年の大阪では、これが
強いテーマになることを期待して
います。なぜかといえば、今回の
パンデミックの時のように、私た
ちは新薬を海に頼るようになるで
しょう。また、私たちは新しい食
品を食べるようになり、その食品
は海からもたらされるでしょう。
地球上の生物の生息空間の90%
は海の中にあるので、これは論理
的なことです。しかし、それは現
在私たちが食べている食物ではあ
りません。私たちの祖父母は、私
たちとはまったく違うものを食べ
ていましたよね。私たちの孫たち

も、私たちとはまったく違うものを食べるでしょう。彼
らは持続可能な食事をしましょう。大きな魚は食べず、
海藻や藻類を多く食べるかもしれません。まだ実際には
発明されていませんが、私が「海の豆腐」と呼んでいる
食べ物は、植物プランクトンをベースにしたもので、こ
れは「海の農業」になると思っています。未来の世代の
ための栄養価の高い良い食べ物なのです。大阪ではこの
ような革新的なアイデアを期待しています。そしてもち
ろん、海運のグリーン化、潮流、洋上風力などの海洋エ
ネルギー分野も、大阪では大きく取り上げられると思
います。

竹田

—— ありがとうございます。角南理事長には、万博
の主要テーマとして海を主流化し、持続可能な海のため
の社会的協力、科学、イノベーションを実証する方法に
ついて伺いたいと思います。大阪万博に向けてどのよう
な準備をしたらよいか、ご意見をお聞かせください。

角南

—— 大阪万博が本当に目指すべきものを強調してくれ
てありがとうございます。まさに大阪万博が取り上げる
べきアイデアであり、未来の持続可能な食、栄養、そし
てこの地球規模の課題、気候変動の課題、食糧危機を解
決するためにイノベーションをもたらすという全体的な
アイデアなのです。私たちは、日本政府や大阪府など、
さまざまなレベルの組織のリーダーとコミュニケーショ



2025年の大阪・関西万博の会場

ンを取り、国際社会が海洋問題で一致団結していることをアピールしてきました。そして、2025年に万博を開催するにあたり、海や自然とどのように共存していくかを主要な課題のひとつとすべきだと考えています。万博の会場は、海に囲まれた大阪湾の真ん中に位置します。私たちは、この海に面した万博のために、これらすべてを提示したいと思います。トムソン大使が強調したメッセージは、その場所に物理的にも適していると思うのです。また、大阪の人たちも同じ考えだと思います。海の万博に向けて、大阪の人たちと協力していきたいと思っています。

竹田

—— インタビューも終盤に差し掛かってきました。最後に、『海洋白書』の読者に向けて、メッセージをお願いできないでしょうか。また、今回の『海洋白書2022』のテーマである「これからの10年」の重要性について、ひとことお願いします。

トムソン

COP26の会場で、『海洋白書2021（英語版）』を頂き有難うございました。「国連海洋科学の10年」や「ブルー・リカバリー」「漁業改革」「海洋安全保障」など、すべての問題を網羅した「白書」を読みました。このような高い水準の内容を維持していただきたいと思います。大阪万博に向けて、また、「大阪ブルーオーシャンビジョン」の実現に向けて、日本の海洋イニシアチブをさらに推進していただきたいと思います。

2019年に大阪で開催されたG20で合意されたメッセージは、とても重要だと思います。しかし、大阪ブルーオーシャンビジョンがプラスチック汚染から海を解放するために非常に重要なものであることを、常に訴えていかないと、頭の隅に追いやられてしまいます。ですから、ぜひともそのことを訴え続けていただきたいと思います。

「これからの10年」については、「健全な海なくして健全な地球なし」という私の信条をご存知でしょう。そして、海の状態は明らかに悪化しています。では、現在から2030

年までの10年の間に、私たちは何をしなければならいのでしょうか？ もっともっと努力しなければなりません。（特定の）何人かだけがこの問題の解決を任されているわけではありません。全員が問題の一部であり、全員が解決策に参加しなければならないのです。私たちは、もちろん希望を持つべきです。人類が石器時代から宇宙時代まで生きてこられたのは、驚異的なイノベーションの力があつたからです。私たちは自分たちが作り出した問題や、角南理事長が話されたように、自然に押し付けられた戦争から抜け出すために努力し、考えることができます。平和的な解決策を見出すために、ホモ・サピエンスが持っているこの驚くべきイノベーションの力を使うのです。お時間をいただき、ありがとうございます。角南理事長、また近いうちにお会いできることを楽しみにしています。

角南

—— 私もお会いするのを楽しみにしています。本日は、どうもありがとうございました。

竹田

—— トムソン大使、角南理事長、海洋政策に関するご意見やお知恵をお話いただき、ありがとうございました。今後の取組みを楽しみにしていますし、できれば次回、直接お会いしたいと思います。改めて、ありがとうございました。

